

50年前

学校のすがたが  
変わり始めた頃

## ボランティアと奉仕

似ているけれど、別のもの。色々なかたちがあることが良い事です。

完全に自分の事は自分でまかないながら災害復旧活動に参加するスーパーボランティア・尾畑さんが叙勲されたのは、平成30年の事でした。

☆

尾畑さんの行動から学べるようにボランティア活動には、「自分が出来る事を、自分が出来る時に、無理のない範囲でおこなう、そして無償という事」が基本にあります。

今ではすっかり定着したボランティア活動ですが、わたしが関わり始めた50年ほど前は、社会福祉協議会が窓口となって、独居老人の訪問活動などの形で市町ごとの活動でした。

活動の定着に、昭和51年から続く『わたぼうしコンサート』が大きな役割を果たしています。さまざまなハンディを持った人々が参加する音楽祭であり、全国各地で開催される中で、若者を中心として、これを支えるボランティアが育成されて行ったのです。

★

しかし学校では、かなり長い間、すでに定着していたJRC(子ども赤十字)を中心とした、児童会・生徒会の奉仕活動と混同されていました。

だとしても、このような社会活動は、子どもの心の成長に大きなはたらきをします。

ボランティア活動を通じて、さまざまな場面で、さまざまな立場の人と触れ合い、それによって人が社会とのつながりの中で暮らしている実感を得られるからです。

また、そこで得る自己有用感によって子どもの、社会への信頼が育ちます。あるいは、自分の考えと人を思いやる気持ちのバランスのとり方も身につく事でしょう。

☆☆

元来、ボランティア活動は、一人ひとりの自発的な行動です。しかし、学校の奉仕活動をきっかけに、社会人になってからボランティア活動を行う人が大勢います。社会体育や野外活動の分野でもたくさん活動されています。

それを見ると、ボランティアの原則は、そのまま、人としてどのように社会に貢献するかという姿勢を示してくれるように思います。

そこで、もしあなたが、子どもを参加させるのであれば、環境保全活動が気軽に参加できるのではないのでしょうか。

たとえば、虹の松原での清掃活動は、色々な団体が呼びかけており、その都度、ボランティアが集まっています。

子ども時代に社会参加した経験は、直接、ボランティアを養成するだけでなく、先に述べたとおり、日頃から自分と社会的とのあり方を考える習慣を育ててくれます。

ボランティア活動を通じて育つものはたくさんあるようです。

なによりも、自己有用感を高めるはたらきに注目したいものです。そしてそれは、間違いなく自動的に自己肯定感を高めてくれるはずです。

私自身の体験から、大事なものは建て前ではなく、参加して行動することだと感じます。

あなたと子どもさんのため、お勧めします。

